

# 『クラウディアの祈り』を読む

—不条理に翻弄された愛とその超克—

安元隆子

Takako YASUMOTO. A study on *The prayer of Kraudia*. *Studies in International Relations* Vol.36, No.2. February 2016. pp.13 – 22.

*The prayer of Kraudia* is the story of Hachiya Yasaburo, his Russian wife “Kraudia” and his Japanese wife “Hisako”. He was sent to a prison camp in Russia on a false charge. World War II had Hachiya completely baffled. He met “Kraudia”, and married her in Russia. However, Hachiya’s Russian wife “Kraudia” thought she could not enjoy happiness from another’s unhappiness, because his Japanese wife “Hisako” waited for him for 51 years. “Kraudia” decided to part from him. After his return to Japan, all three people continued to be considerate towards each other. This is a way to overcome the love triangle.

## 1. はじめに

『クラウディアの祈り』は、蜂谷彌三郎と彼の日本人とロシア人の二人の妻の物語である。

この蜂谷と二人の妻をめぐる物語は、1998年の「NNNドキュメント98」、2002年に同じNNNで、ロシア人妻のクラウディア・レオニードブナを見舞いに訪露する蜂谷のドキュメントが放映され、2004年4月には「奇蹟体験！アンビリバボ」でも紹介されている。

書籍では、『シベリア虜囚半世紀—民間人 蜂谷弥三郎の記録—』（坂本龍彦，恒文社，1998年7月），『クラウディア最後の手紙』（蜂谷彌三郎，メディアファクトリー，2003年3月），『クラウディア奇蹟の愛』（村尾靖子，海拓社，2003年11月），『クラウディアの祈り』（村尾靖子，ポプラ社，2009年3月），『望郷』（蜂谷彌三郎，致知出版社，2012年10月）がある。ただ、『クラウディア最後の手紙』は、「蜂谷彌三郎著」となっているものの、別の執筆者が蜂谷の名を借りて書いたようである。蜂谷は一行も書いていないことを蜂谷自身が後の『望郷』の「あとがき」の中で打ち明けている<sup>1</sup>。蜂谷は読者を裏切ること、また事実と異なることが書かれていること<sup>2</sup>に耐えることができず、自らペンを執ったのが『望郷』である。この『望郷』

は、2005年には執筆は完了していたようだが、出版には至らず、7年後にやっと日の目を見た。

これら5冊の著作は事実に基づいたノンフィクションであり、作品に描かれた蜂谷と久子、クラウディアを巡る事実自体は基本的にほぼ同じである。ただ、村尾靖子<sup>3</sup>の著した『クラウディアの祈り』は『クラウディア奇蹟の愛』とほぼ同内容であるものの、2003年刊行の『クラウディア奇蹟の愛』のその後の三人の様子を補填している点が特徴的だ。そして、この2作品は、二人の妻たちの互いを尊重しようとする愛の形に重心を置いて書かれている。一方、蜂谷の書いた『望郷』は、ソ連に抑留された蜂谷の母国への思いがいかに強いかを具体的に記していて、蜂谷の最終的な選択の正当性（「望郷の念」）が強調され、蜂谷の決断をよく理解することができる。また、蜂谷のクラウディアと久子へのそれぞれの深い愛が蜂谷の立場を通して描かれている。そして『クラウディア最後の手紙』は三者の愛の形の意味付けがある程度示されていて、理解しやすい内容だといえるだろう。『シベリア虜囚半世紀』は坂本龍彦の編著となっており、蜂谷と坂本の共同作業による蜂谷の人生の記録である。女性囚人としてシベリアに抑留された村上秋子や坂間文子のことにも触れ、無実の罪で流刑に追いやられた日本人の苦難に満ち

た人生の活写に主眼が置かれている。

本論では、『クラウディアの祈り』を中心に、これらの著作を通して蜂谷彌三郎と二人の妻のそれぞれの軌跡と愛の在り様について、同じように戦争によって引き裂かれた愛を描いた映画『ひまわり』などと比較し、考察していく。

## 2. 蜂谷彌三郎と二人の妻の物語

上記5冊から読み取れる、蜂谷彌三郎とその妻たちの人生の主要部分をまとめると次のようになる。

1918（大正7）年に滋賀県に生まれた蜂谷彌三郎は、朝鮮・平壤の仁川陸軍造兵廠平壤兵器製造所の検査係として働いている時、終戦を迎える。妻の久子と1歳の幼い娘とで日本への帰還を目指す、ソ連軍の侵攻に阻まれ、秋乙で引き揚げを待つことになる。しかし、その秋乙日本人会で不審な「安岡」と出会う。助け合いの精神から安岡と何度か食事を共にしたところ、蜂谷は突然ソ連兵に連行され、妻子と離ればなれになってしまう。そして、留置場に入れられた蜂谷は、安岡の偽証言によりスパイ罪の汚名を着せられ、懲役十年の刑が決定する。1947年1月、シベリア抑留が始まり、ウラジオストク、ハバロフスク、「生き地獄」と呼ばれたウルガル603強制収容所で強制労働に従事した。その間、腎臓病と腎臓結石が判明し、両足の動きもままならず生死の境をさまようが、生きていくために収容所内での労働が軽度な理髪技術を学んだ。マガダンの収容所へ送られた後もこの理髪技術が身を助け、7年間で刑期を終えることが出来た。しかし、その後も帰国は許されず、厳しい監視のもとでの生活を強いられる。そのような中で出会ったのがロシア人のクウディア・レオニードブナである。二人は結婚し、彼女の献身的な愛により蜂谷はロシアでの生活を続けることが出来た。

蜂谷の日本人妻・久子は、看護婦として働いている時に蜂谷と出会った。蜂谷と共に朝鮮にわたり終戦を迎えたものの、蜂谷の連行とシベリア抑留により、幼い1歳の娘・久美子と苦難の引き揚げをする。帰国後、蜂谷の実家のある滋賀県を経

て、自分の実家のある鳥取へ移り住んだ。戦後、娘を道連れに死のうとしたこともあったと村尾靖子には打ち明けている。その後、久子は看護だけではなく、保健婦の資格を取り、「わたしの戸籍には、ずっとお父さんのなまえがあったんだから、再婚しないのは、あたりまえでしょ。」と語って、再婚せずに女手一つで子供を育てた。そして、久子は蜂谷の死亡届を出さず、蜂谷の名前で貯金を続け、帰国に備えた。高齢になってからは、自分が死亡した時に彌三郎の葬儀も一緒に行くことを周囲に依頼していたという。

一方のクラウディアは1921年に大地主の娘として生まれたが、ロシア革命により家は没落し、実母の死の後に家にやってきた義母から継子いじめを受ける。そして、遂に捨てられ、物乞いとの生活を余儀なくされるが、彼女を救ってくれた養父母の下で成長する。19歳の時、コムソモリスクナムーレで国の食料倉庫監視人として働き始め、その後、出会いがあり結婚した。しかし、上司の不正の罪を着せられ、10年間、強制収容所へ送られる。収容所から帰った時には夫は別の女性と再婚しており、クラウディアは以後一人で生きざるを得なかった。まじめな勤労が認められ、「休息の家」で時を過ごしていた時に蜂谷と出会い、無実の罪により強制収容所に送られたことなど境遇が似ていることから、語り合い、親交を深めた。そして、クラウディアが民族差別の少ないアムール州への移住を勧め、蜂谷もそれに応え、プログレス村で二人は結婚生活を始めたのだった。

## 3. 蜂谷の帰国までの道程

1953年、スターリンが亡くなる。1947年から抑留者の日本帰国事業は始まっていたが、スターリンの死後1年の1954年から恩赦による日本人受刑者送還が始まった。1955年、マガダンで出会った受刑者の森川寿が帰国し、蜂谷の生存を日本の厚生省や家族に知らせているが、なぜか蜂谷にはソ連当局からの呼び出しは来ないまま、1956年12月、受刑者送還は完了してしまう。絶望の中で蜂谷は「生きていくため」にソ連国籍を取得する。その後、ロシア人女性ドゥシャーとの同居、彼女

の裏切り、彼女の家族の民族差別などが重なり、自殺を図ったが未遂で終わった。そして、前述したようにクラウドディアと出会い、プログレス村で結婚生活を送る。しかし、理髪師としての仕事に身体が耐えられなくなり、蜂谷は写真の仕事を始め、クラウドディアは審査経理士となり働く。彼らの周囲には良き理解者も存在した半面、蜂谷のスパイの疑いは消えず、差別や侮蔑も相変わらず続いた。老齢になった二人は、彼らの間に子供がないこともあり、死後のことを考え、二つの棺を準備していたという。

1985年、ゴルバチョフの「ペレストロイカ」が始まり、1991年、遂に社会主義国家ソビエト共和国連邦は崩壊する。その後、クラウドディアの友人とナホトカにいた日本ユーラシア協会の日本語教師・金子房三を通して、蜂谷の生存情報が再び日本へもたらされ、1996年、娘・久美子らがロシアへ渡り、蜂谷と再会した。蜂谷の家族が健在であることを知り、蜂谷を帰国させるためのクラウドディアの奔走が始まる。クラウドディアは蜂谷との離婚と引き換えに蜂谷の帰国許可を得、蜂谷は1997年3月23日、帰国を果たした。そして、鳥取で日本の妻・久子と51年ぶりに再会したのだった。久子が蜂谷の戸籍を残していたことが幸いし、日本国籍も順調に回復した。翌年、ロシアから蜂谷の名誉回復証明が届き、彼がスパイではなかったという身の潔白も証明された。

#### 4. 妻たちの手紙

久子は存在が確認された蜂谷に次のように記した。「お父さん よくぞ生きていて下さいました。本当に夢のようです。(中略) 一番申し上げたきことは是非 是非 帰国できます日を祈っております<sup>4</sup>。そして、クラウドディアには「彌三郎が大変お世話になり、貴女様のおかげで今まで生きながらえて居られましたことを厚く厚くお礼申し上げます。貴女には申し訳ありませんが、どうか主人を日本に帰らせてやってください。本当に勝手なお願いでございますが、よろしくお願い申し上げます<sup>5</sup>。」と、クラウドディアに感謝の意を表しつつも、蜂谷の帰国を何よりも願う気持ちを綴って

いる。

一方、久子の気持ち、蜂谷の気持ちを考えあわせ、クラウドディアは蜂谷の帰国のために奔走する。クラウドディアがハバロフスク日本領事館宛に提出した帰国同意書には次のようにある<sup>6</sup>。

日本の妻、久子さんの立場を思うとき、かわい女の身で幼い子を背負い国境を越え、祖国日本帰還に九死に一生の望みをかけて、それを果たされた渾身の努力と精神力に私は心から尊敬致しております。久子さんは一日千秋の想いで今日の日を待ち続け、このたび夫との再会を間近に控えていられるのを思うとき、女同士の心のつながりとでも言いましょうか、決して、このまま見過ごすことはできないと涙するのでございます。(中略) 他人の悲しみの上に自分の幸福を築き上げることは、人道上、決して許されるべきでないとの考えは、私の固い信念でもございますので、どうぞ彌三郎さんの帰国が一日でも早く実現いたしますようご支援のほどを切にお願い申し上げます。

1996年11月15日

ここに書かれた「他人の悲しみの上に自分の幸福を築き上げることはできない」という考えが、クラウドディアの行動の規範を明らかにする。この利他、そして、自己犠牲の精神こそがクラウドディアの人格の根幹なのだ。そして、クラウドディアは久子に、蜂谷が自分の意志で妻子との離別の道を選んだのではなく、無実の罪を着せられ、苛酷な刑罰に苦しめられたからであることを察して欲しい、と頼む。それは、クラウドディア自身が上司の犯罪の罪を代わりに背負わされ、同じ運命に苦しんだ者ゆえ発せられた言葉である。蜂谷を「憐れみを持って受け入れてください<sup>7</sup>。」と日本の妻に懇願するのである。

さらにクラウドディアは、蜂谷に「あなた方が心をさらけだしていくことによって、いつのまにか打ちとけあって、もとの夫婦に戻れると信じています。そして、こちらのことも、少しずつ忘れられると思います。そのようにして、もとのむつまじい二人に戻ってくださることをわたしに約束してください。」(1997年4月24日)と書いている<sup>8</sup>。

クラウドディアの利他、自己犠牲の精神は蜂谷に対しても一貫していて、揺るぎがない。

クラウドディアは蜂谷の誕生日に、声の便りを送る。それは、蜂谷の罪悪感を少しでもなくそうとするものであった。

わたしは、あなたに贈りたいものがございませう。それは心の自由です。あなたの心がこれ以上ふたつに引き裂かれないように、早く私のことは忘れて、ただ、ただ一途に久子さんのために尽くしてあげてください。それで、あなたや久子さんが、ほんとうに幸せになってくださるならば、わたしの心の底から尽くしたあなたへの純粋な愛情が通じたものとして、わたしは、このうえない喜びでございませう。(1997年7月30日)<sup>9</sup>

こうした「清らかな魂の喜び」を持って、共に暮らした日々を心から感謝し、この喜びの心とともに安らかにこの世を去っていかうとするのがクラウドディアなのである。この言葉を聞き、蜂谷はすぐにクラウドディアに連絡をし、文通や電話を通してつながることを約束し、実行している。

## 5. 蜂谷の選択

蜂谷は最終的に日本に帰国し、日本人妻・久子の元に帰ることを選ぶ。何が彼をそうさせたのだろうか。ちなみに、現代では、夫婦の間がうまくいなくなり、夫が家を出、別の女性と生活を続けた場合、その内実が結婚生活と同等であれば、妻との形だけの婚姻よりも実質的な結婚生活を送っていた内縁の妻が優位とみなされる。クラウドディアは37年間、蜂谷を守り、共に暮らしている。一方、日本人妻の久子が共に暮らしたのはわずか5年間である。しかし、待ち続けたのは51年間である。両者を比較すること、また、どちらかを選択することは非常に難しい。しかし、蜂谷はクラウドディアの心情を十分に理解していた。それはクラウドディアに宛てた2002年6月26日の手紙が示すだろう<sup>10</sup>。

過去37年間、無実の罪に泣いた私たち二人のロシアでの生活。ただ一人、私の無実を信じ、献身的な愛情で厳しい社会情勢の中で、日本

人スパイの妻とまで言われて、世間の人々からの冷たい視線に堪えながら、毅然たる態度で、当時のソ連社会から守り通してくれた恩は生涯決して忘れはしない。(中略) 望郷の心にさいなまれている私を、心ゆくまで理解してくれたのも、この世でお前ただひとりだけだった。世情が移り変わり、祖国日本へ連絡する時も、あたかも自分の肉親を探すような気持ちで情熱を注いでくれたのもお前だった。娘や弟が日本から訪ねてきた時も、行方が分からない自分の肉親が見つかったように涙を流して祝福してくれたのも、たった一人の私の味方であり私の盾であったお前だった。今日までの久子の苦難の人生を知って、他人の不幸の上に自分の幸せを築き上げることは、どうしても出来ず、また人道上許されるべきではないとして、自分の不幸な過去の人生をまったく顧みず、ただ、ただ、久子の老後を慰めてやってほしいと言い、祖国帰還に同意してくれたね。そればかりか帰国に伴う書類の作成や官庁との折衝、一日も早い帰国実現のため、病氣療養中の身にもかかわらず、ハバロフスク日本総領事館へ嘆願のため、昼夜兼行の旅程で最大限の努力を惜しまなかったのもお前だった。崇高な真実の愛を教えてくれたお前の純粋な心に対して、朝夕の感謝の気持ちは、どんな言葉でも文章でも、到底言い表すことはできない。無限の心より感謝を捧げたい。

このように深い愛を示してくれたクラウドディアに感謝しつつ、蜂谷は彼女の心の奥底の悲しみをも見逃していない。クラウドディアが蜂谷と別れた後に支援を受け来日をしたことがある。その別れ際に今回が二人が会うことのできる最後の機会になるろう、と語りあった時、クラウドディアの週一回の「国際電話だけは絶たないで」の言葉を聞き、蜂谷は彼女の信念であった「あなたたちの幸福が私の幸福だ」は強がりであると察し、彼女の別れのつらさを思いやり、次のように書いている。「天涯孤独のクラウドディアをまた一人の孤独な生活に追いやってしまう私の運命を恨みました<sup>11</sup>」。蜂谷は一人ロシアに残ることになるクラウドディアに対し、

「無慈悲な気持ちに罪悪感」を持ったのだという。蜂谷はクラウドディアの崇高さと同時に、十分に彼女のもろさ、弱さも理解している。

二人の妻の間で選択を強いられた蜂谷の構図はいわゆる「三角関係」である。しかし、この構図は単純な三角形ではないように思う。辺の長さが違う、ということでもない。実は頂点以外の二つの点は同じ平面にあるのではなく、異次元にあるのではないか、ということだ。つまり、拮抗しない点なのであり、両者はきしみはありつつも、並存可能だったのではないだろうか。蜂谷自身も次のように語っている。「二人をともに愛していますが、かわいそう、気の毒だったという気持ちは久子のほうによりおおくかかってきます。クラウドディアについては、三十七年間一緒に苦楽をともにして、しかも、お互いに恐怖を共有しながら暮らしてきた。その恐怖の中でも私を必死にかばい、守ってくれた感謝の気持ちがより強いように思います<sup>12</sup>」。つまり、久子、クラウドディアともに妻として愛し、彼女たちも夫として蜂谷を愛しているのだが、その愛の在り方には微妙に差があり、久子には妻への愛、クラウドディアには逆境を生き抜くための同志への愛であり、人間愛とも呼べるものだったのではないだろうか。久子から蜂谷への愛は夫への愛であり、また、家族愛でもあったろう。しかし、クラウドディアの場合は夫への愛であると同時に、逆境を生き抜く同志愛であり、また、どんな犠牲を払っても子供の幸せを祈る母親の愛情にも似ていたように思う。このことによって、通常「三角関係」に付随して発生する「嫉妬」の感情が3人の表面上に現れることはなかったであろう。「この二人の存在が私の生きる糧<sup>13</sup>」とは蜂谷の言葉であるが、これは決して蜂谷の優柔不断さを示しているのではなく、いわばレベルの違う二つの愛に恵まれた蜂谷の心情を著したものと見えるだろう。

では、その次元の違い、しかし両方ともかけがえない愛のうち、なぜ蜂谷は久子の愛を選んだのだろうか。

## 6. 蜂谷が久子のもとに帰った理由

蜂谷が久子の愛を選んだ理由について、蜂谷自身の言葉を聴こう。蜂谷自身は『望郷』の中で次のように語っている<sup>14</sup>。

クラウドディアと日本の家族のどちらが大切かと言われると私もつらいのです。どちらも愛しています。ただ、私の愛は祖国にあるので、どうしても祖国に重きを置いてしまう。ただそれだけです。二つに一つでどちらをえらべるというものではありません。

つまり、「祖国への愛」、換言すれば、望郷の念が久子の愛を選ばせた、というのである。この望郷の念の内実について、次に振り返る。

### ① 望郷

蜂谷がスパイ容疑により強制収容所の苛酷な生活を送ったことと、その後も監視され、民族差別を受ける辛さを充分すぎるほど味わってきたことは前述の通りである。そのような中で蜂谷が作った歌—「かにかくに 母なる人は 忘れまじ オロシヤのくにに 囚われの身は」(1955年2月15日)<sup>15</sup>。蜂谷の母への想いを歌にしたものであるが、これは引上げ船が着くたびに埠頭に立って我が子を探したという蜂谷の母の息子を想う気持ちと重なるものである。このような母への想いは「望郷」の大きな部分を占めるものであった。蜂谷は「モンテンパの夜は更けて」<sup>16</sup>の替え歌をつくったという。南国モンテンパからの望郷は、「シベリアおろしの夜は更けて 届かぬ思いにやるせない 故郷の空を見上ぐれば 涙に滲む夕空に 母の姿が浮かび来る 渡る雁がねまた来ても恋し我が子は帰らない 母の想いはただ一つ シベリアの空を駆け巡る 定めは厳しい北斗星 シベリアおろしに春が来りゃ 凍った柳も芽をふかす 俺も生きよう一筋に 死んじゃならぬくじけまい 祖国の土を踏むまでは」<sup>17</sup>というように、シベリアの極寒の中、母のいる祖国を想う気持ちに替えられた。それだけではない。蜂谷は祖国・日本を想い日本語を忘れないように、たまたま入手できた日本の新聞をぼろぼろになるまで読み漁り、日本語で独り言を言った。母や妻子に向けて声に出して話すことで日本語の音を記憶していたのだ。童謡、

流行歌などを歌うこともその一環だったと考えられる。そして、毎晩、就寝前に漢字の書き取り100字と親しかった人々の名前とエピソードを想い出すことを日課にした。小倉百人一首は94首まで思いついたという。また、教育勅語を唱えて清書し、日本人としての誇りを堅持したともいう<sup>18</sup>。

こうした蜂谷であってみれば、死ぬなら日本で死にたい、そして、日本の土になりたい、と思うのは当然すぎる当然であろう。彼の自筆と考えられる著書のタイトルは『望郷』。まさにこの望郷がクラウドディアと共にロシアに生きることも「日本」への帰国を選ばせたのである。

## ② 子供の存在

しかし、もう一つの要素がある。それは子供の存在ではなからうか。蜂谷自身は遂に母親とは再会を果たすことができなかったが、妻と娘の写真を肌身離さず持ち歩いてきたという。そして、久美子の写真を壁に張り、写真の前で久美子の誕生日をクラウドディアと祝うのが習慣だったというのだ。この写真は、1956年、日本からの小包が奇跡的に届き、検閲を受け、中身もずいぶんと少なくなっていた箱の底にあった写真で、裏には、「ワタクシハ オトウサンニ アイタイトオモイマス ハヤクカエツテクダサイ」と久美子の言葉が記されていたものだった<sup>19</sup>。

一方で、蜂谷が日本に宛てた手紙は結局家族のもとには届かなかったが、蜂谷は次のようにしたためたという。「いくら努力してもわめても、わたしは、日本に帰れるかどうかままったくわからない生活を強いられている。わたしのことは、どうか早く忘れて、娘のためにもぜひいい人を見つけて再婚してほしい。娘は、わたしの形見だから、再婚しても娘だけはたいせつにしてやってほしい。それだけが父親としてただひとつの願いだ。心から、おまえたちの幸せを願っている」<sup>20</sup>。

このように、蜂谷は父親として娘への想いを第一に綴っている。妻への想いもさることながら、小さな娘を心配し、幸せを祈る父親としての切実な思いがあったのだと思われる。

この子供への想いは久子にもある。それは蜂谷との子供・久美子に対してではなく、クラウドディアと蜂谷の子を想定して、である。

「ロシアの女性と一緒に暮らしているとわかったとき、長年一緒に生活しとったんだから、子供がいるのがとうぜんだと、一番先に考えました。」(中略)「わたしはね、考えた末にお父さんに会いに行くという娘に云いましたよ。もしも、ロシアにお父さんの子どもがいたら、お父さんがいくら日本にかえりたいといっても、永住帰国は承知しないようにしよう、って」(中略)「そうでしょ？子どもから父親をむりやり引き離すようなむごい仕打ちは、わたしの娘一人で、もうたくさんです」「もしも、あちらに子どもがいたら、娘より年が少なくて決まるとるでしょう。(中略)だから、いくらお父さんが恋しくても、こっちがあきらめなきゃならないでしょう。お父さんをわたしたちが説得しなきゃあって、心に決めていました。それが人間の道でしょう。」<sup>21</sup>

前述したように、久子はクラウドディアに「お父さんを返して欲しい」と手紙で訴えていたが、その背景にはこのような思いが存在していたのであり、夫を恋しく思う気持ちと共に、子供・久美子のことを考えての訴えであったことが明確になる。

クラウドディアは、蜂谷との子供を望んでいたが、年齢的にもそれは叶わなかった。それゆえ、クラウドディアには子供を思う二人の気持ちにこたえようとする思いが強かっただろうし、その背後には幼くして実の両親と離れ離れになり、愛情に飢えた子供時代を送ったクラウドディア自身の経験があったにちがいない。

このように、「望郷」と「子供への愛」が蜂谷を日本に帰らせた大きな要因になったと考えられる。

## 7. クラウドディアと彌三郎の再会と三人のその後

いつもはしっかりとしたクラウドディアの手紙の文字が乱れていることから異変を察した蜂谷は、2002年1月3日、久子に見送られて厳冬のロシアへクラウドディアを見舞いに出かけた。2003年、支援者によりクラウドディアは来日を果たし、以後、数回日本を訪れている。久子はあなたの存在があったから蜂谷は生きながらえることができた、と来日したクラウドディアに抱きつき、感謝の意を表し

たという。

2007年5月、久子は「お父さん、ありがとう」という言葉を残し、亡くなった。2014年11月、蜂谷を送りだして17年間一人暮らしを続けたクラウディアも、友人に看取られ亡くなった。そして、2015年6月10日、蜂谷彌三郎は96歳で波乱の人生の幕を閉じた。

## 8. 戦争によって翻弄された愛の形

蜂谷彌三郎と日露の二人の妻の物語は、戦争によって翻弄された愛の物語、と呼び換えることができるだろう。しかし、このような例は蜂谷たちだけだったのだろうか。再会までに51年間という長い年月がかかったのは稀有な例であろうが、こうした悲劇は市井では枚挙に暇がなかったと推察する。例えば、2015年8月14日の『神奈川新聞』には「戦死の誤報で母再婚 父二人のはざまで娘は…」のタイトルを付した記事が掲載されている。内容を要約すると以下のようである。

——尾畑慶子さん（76才、旧姓前川、横浜市鶴見区）の母・邦子さんは終戦から2、3年後に父・前川治助さんの戦死公報を受け取った。父のお葬式をし、母は生活を案じた近所の人紹介で再婚した。2人の幼い弟は新潟の父方の実家に引き取られ、母は新しい父との間に妹と弟をもうけた。しかし、治助さんは生きていて、フィリピンの刑務所で健在であることが分かった。邦子さんは煩悶し、日本人戦犯の減刑のために奔走した横浜出身の歌手、渡辺はま子さんに手紙を書いた。「再婚したものゝ、前川が生存して居ると知った其の時から、此の帰りを待ちわびて来た私でした」と。治助さんが帰国した時、横浜港で慶子さんにかけて言葉は「お前、腕は大丈夫か」だった。ごく幼いころ腕に負った娘のやけどを、ずっと心配し、フィリピンで10年間、家族を思い続けていたのだ。治助さんの帰国がかなった53年7月の恩赦に加え、同年12月、さらなる恩赦で釈放されるまで、治助さんは東京・巣鴨刑務所で服役した。その間、母・邦子さんは再婚した夫とともに巣鴨を訪れ面談し、最終的に邦子さんは治助さんを選んだ。二人は大恋愛で結ばれ、邦子さんは16歳で慶

子さんを生んだという。その想いを消すことはできなかったのだ。慶子さんは治助さんと邦子さん、そして離れていた弟とも一緒に暮らすことになった。一方で、新しい父は身を引き、妹と弟を連れて家を出た。その弟は病で早世し、妹は慶子さんが20代前半のころ奉公に出されることになった。そのことを慶子さんが伝えると、治助さんは自分が引き取ると言い、戦後十数年、戦争に翻弄された慶子さんの兄弟が一つ屋根の下に集まった。慶子さんは「私たちを育ててくれた新しいお父さんにも恩返しができた」と思ったという。——

この尾畑さんの父母の場合は蜂谷の場合と逆転し、女性が二人の男性の間で悩み、決断するというものである。いずれにしても、こうした戦争によって翻弄された愛は、日本中に見られたのに違いない。いや、それは日本に限ったことではない。世界中であったことなのである。そのことを映像化しているものの一つが、人口に膾炙した映画『ひまわり』<sup>22</sup>である。

『ひまわり』には幸せな結婚式を終えたばかりのジョヴァンナとアントニオが登場する。二人の軌跡を追えば次のようだ。幸せな二人に戦争の影は否応なく迫り、アントニオは厳寒のロシア戦線に送られて、雪原の中で消息を絶ってしまう。彼の生存を信じて疑わないジョヴァンナは一人でロシアの地に出かけ彼を探す。しかし、やっと探し当てた夫はロシア人女性との間に新しい家族を作っていた。それを知ったジョヴァンナは、列車に飛び乗り号泣する。アントニオはロシア人妻の了解のもと、ジョヴァンナに会いに出かけるが、二人に過ぎ去った時間は戻らない。なぜなら、ジョヴァンナにはすでに別の男性との間に子供が生まれていたのだ。アントニオはかつてジョヴァンナに見送られ戦地に向かった駅のホームから再びロシアに向かい、ジョヴァンナは彼を見送る。

哀切なメロディのテーマソングと、アントニオを探すジョヴァンナの一途な心や、アントニオを疑わない清廉なロシア人妻のたたずまいが観る者の心をつつ映画である。これもまた、蜂谷と同じくロシアの地を舞台に新しい愛を見つけた男性のいわば「三角関係」の物語である。ジョヴァンナは彼女にとっての夫の裏切りに絶望しながらも、

決してアントニオやロシア人妻を責めることはしない。自ら「別れ」を決意し、新しい人生を選ぶのである。心に悲しみを抱えながら、あえて前を向いて進もうとするその姿は美しくもあり、また悲しみが漂う。これもまた、愛の三角関係を清算する一つの方法である。

しかし、ほとんどの場合はこのように「訣別」することもできず、なぜ、自分を忘れたのか、または、なぜ自分から離れたのかと相手を恨むのが常であろう。どろどろの愛憎劇が刃傷沙汰を招くことはよくあることだ。結果、多くの場合、三者の関係は崩壊する。

一方、蜂谷と二人の妻、両者の間にあったのは、憎しみ合い関係性を「断つ」ことではなく、相手をいたわり、三者の関係を継続することである。これは三つの愛の形の中で一番難しいものである。蜂谷、そして、『神奈川新聞』に掲載された尾畑さんの例もそうなのであるが、別れてもなお、相手の存在を尊重し、三者がつながり、いたわり合って生きることは難しいだけに美しく、人間だけにできる行為なのかもしれない。それを実際に演じきったクラウディアから日本に届いた手紙を紹介したい。

わたしたちの物語は、三つの傷ついた魂、三人の人生がひとつになってこそそのものなのです。(中略) わたしは彌三郎さんを日本に送りださずにはいられませんでした。わたしは、そのときは自分のことは考えられませんでした。ただひとえに 自分だけの幸福をきずいてはいけないという固い信念を持っていたからです。(中略) わたしは、これから生きる若い人たちがかならず愛と喜びと幸福の中で、人生を送ることができるようにと願ってやみません。世界中のどこでも、いつも平和でおだやかな、青空が輝いていますように。わたしはいつも、一点の曇りもない青空を次の世代に手わたしたいと祈っています。

もう二度と悲惨な戦禍がくり返されませんように。全世界の平和を！(2006年3月)<sup>23</sup>

クラウディア、久子には、蜂谷や相手の女性に対する何の疑いも憎しみもなかった、といったらうそになるだろう。心に少しも波風が立たなかった

ということはないはずだ。しかし、彼女たちは蜂谷を含めた三者が互いにいたわり合い、つながり合うことで、この「三角形」を保持していくことができた。こうした例は稀有な例といえるかもしれない。そこには映画『ひまわり』のように、「別れる」ことで新しい人生を生きてゆく潔さとその悲しみの美が生まれるのとはまた違った、調和的な愛が存在しえたのである。

いずれにしても、このような背景には戦争があったのであり、戦争のない平和な世界を祈るクラウディアの想いは普遍的なものであろう。

## 9. 終わりに

『クラウディアの祈り』を中心に、蜂谷と二人の妻を巡るこれら5冊の著作を併せ読めば、蜂谷が二人の妻たちの狭間で悩みながらも、望郷と子どもへの想いによって帰国の道を選んだことが明らかになる。その選択を誰も責めることはできないだろう。ただ、その耐えがたい望郷の念を一層強めたのは、蜂谷に対するソ連の故なき抑留である。非人道的な収容所生活、そして、その後も消えないスパイ容疑によって差別され続けた市民生活の苦しみがあったことを忘れてはならない。蜂谷と二人の妻たちは、戦争と共に不条理なソ連のスターリン体制とその後の社会体制の犠牲者でもあったのだ。だから、蜂谷とクラウディアの間には、男女の愛だけではなく、逆境を共に生き抜こうとする同志愛、または肉親愛と呼ぶべき愛情が芽生えたのである。

このように、戦争や、抑圧的・非人道的で強固な社会体制など、個々の小さな人間ではどうすることもできないような不条理に翻弄された男女の愛は、これまでも世界中で数え切れないほどあったに違いない。そして、不幸にもそこに「三角関係」が形成される場合がある。しかし、蜂谷たち3人は他の多くの三角関係の愛とは異なり、「他人の悲しみの上に自分だけの幸福を築いてはならない」とするクラウディアに導かれ、当事者たちがいたわり合い、つながりあい、持続していく愛の形を形成した。彼らの物語が感動を持って読まれるのは、主にクラウディアの自己犠牲と利他の精

神，51年間待ち続けた妻の久子の心，そして蜂谷の哀切な望郷の念に心打たれるからなのであろうが，それだけではなく，最後に当事者3人が互いに尊重し合い，調和的な愛の形を形成しそれを保持し続けた，という点にこそ理由があるのではないだろうか。人間は人，土地，権力など，あらゆるものに対し貪欲な所有欲を持つ。それは独占欲となることが多く，“嫉妬”を生み出してゆくのが常である。だから，蜂谷と久子，クラウディアが実現したのは極めて稀な愛の形であろうが，それを実現しえたことに，人間の存在意義と美しさが認められるのではないだろうか。この点において，『クラウディアの祈り』をはじめとする蜂谷彌三郎とその妻たちの物語はこれからも読み継がれていくだろう。

## 【註】

- 1 「私は取材を受けましたが，この本の原稿を一行も書いておりません。」とある。(P232)
  - 2 『望郷』の中で具体的に触れてはいないが，『クラウディア最後の手紙』と『望郷』を比較すると，『クラウディア最後の手紙』には，生きるために周囲に合わせ生活をしてなかなか帰国がかなわず，自暴自棄になりロシア人女性・ドゥシャー家族と同居する蜂谷の姿が描かれている。そして，彼女が彼の行動を警察に知らせていたことが書かれている。
  - 3 1944年，山口県生まれ。結婚後，家事と子育てをしながら執筆活動。1998年の「NNNドキュメント98」，2002年クラウディアを見舞いに訪露する彌三郎のドキュメントを見て，取材を決意し，その取材をもとに執筆したのが『クラウディア 奇蹟の愛』と『クラウディアの祈り』である。
  - 4 『クラウディアの祈り』（村尾靖子著，ポプラ社，2009年3月），pp.194-196
  - 5 同掲書，pp.205-206
  - 6 同掲書，pp.202-204
  - 7 同掲書，p.208
  - 8 同掲書，pp.225-226
  - 9 同掲書，pp.232-233
  - 10 同掲書，pp.251-252
  - 11 『望郷』（蜂谷彌三郎，致知出版社，2012年10月）pp.203-204
  - 12 同掲書，p.4
  - 13 同掲書，p.213
  - 14 同掲書，p.204
  - 15 同掲書，p.143
  - 16 1952年（昭和27）1月，歌手の渡辺はま子に楽譜と短い手紙が届いた。その楽譜「モンテンルパの歌」は刑務所に収容されていた日本人111名の望郷の念を込めた曲であった。作詞代田銀太郎，作曲伊藤正康。代田銀太郎は元フィリピン憲兵隊少尉。伊藤正康は元陸軍将校。二人はフィリピンのマニラ郊外のモンテンルパの丘にあったニューピリビット刑務所で戦犯として死刑判決を受けていた。封書を受け取った渡辺は，早速歌をビクターレコードに持ち込み，ほとんど修正無しで吹き込んだ。題名は『ああモンテンルパの夜は更けて』とされた。その後，この歌のヒットや渡辺はま子をはじめ加賀尾秀忍ら関係者の努力が，当時のフィリピン当局を動かし，1953年（昭和28年）エルピディオ・キリノ大統領の特赦によって戦犯の帰国が実現した。
- (一)
- モンテンルパの 夜は更けて  
つるるの思いに やるせない  
遠い故郷 し の び つ つ  
涙に曇る 月影に  
優しい母の 夢を見る
- (二)
- 燕はまたも 来たけれど

恋しわが子は いつ帰る  
 母のころは ひとすじに  
 南の空へ 飛んで行く  
 さだめは悲し 呼子鳥

(三)

モンテンルパに 朝が来りゃ  
 昇るころの 太陽を  
 胸に抱いて 今日もまた  
 強く生きよう 倒れまい  
 日本の土を 踏むまでは

- <sup>17</sup> 『望郷』(蜂谷彌三郎, 致知出版社, 2012年10月) pp.149-150
- <sup>18</sup> 同掲書, pp.151-153
- <sup>19</sup> 同掲書, p.156
- <sup>20</sup> 同掲書, pp.158-160
- <sup>21</sup> 『クラウドディアの祈り』(村尾靖子著, ポプラ社, 2009年3月), p.35
- <sup>22</sup> ヴットリオ・デ・シーカ監督。ソフィア・ローレン, マスチェロ・マストロヤンニ出演。イタリア・フランス作品。1970年。
- <sup>23</sup> 『クラウドディアの祈り』(村尾靖子著, ポプラ社, 2009年3月), pp.264-266

#### 【主要参考文献】

- 1 『シベリア抑留—未完の悲劇』(栗原俊雄著, 岩波書店, 2010年5月)
- 2 『シベリア抑留とは何だったのか—詩人・石原吉郎のみちのり』(畑谷史代, 岩波書店, 2009年3月)
- 3 『極光のかげに シベリア俘虜記』(高杉一郎, 岩波書店, 2011年11月)
- 4 『シベリア抑留』(堀江則雄, 東洋書店, 2003年11月)
- 5 『コムソリスク第2収容所』(富田武, 東洋書店, 2012年10月)
- 6 「旬報試写室 ひまわり」(品田雄吉, 『キネマ旬報』, 1970年8月)
- 7 「ひまわり」(山本恭子, 『スクリーン』, 1970年10月)
- 8 『三角関係の超・心理』(畑田国男, 毎日新聞社, 1994年7月)